

平成30(2018)年度

- 1月29日 要人櫓台石垣解体範囲検討
- 3月5日 要人櫓台石垣復旧方針了承
- 要人櫓台石垣解体範囲了承
- 五階櫓台・要人櫓台石垣基底部等の発掘調査了承

平成31・令和元(2019)年度

- 9月13日 五階櫓・要人櫓台石垣基底部等の発掘調査成果報告
- 要人櫓台石垣復旧工法了承
- 11月7日 要人櫓台石垣解体設計了承

令和2(2020)年度

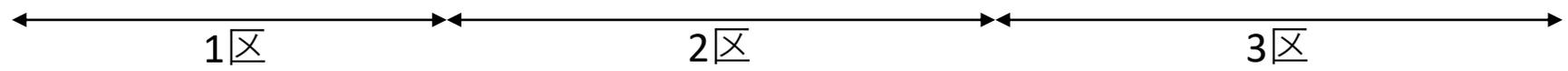
- 5月12日 要人櫓台石垣解体開始
- 5月19日 江戸期遺構面発見
- 7月3日 要人櫓台遺構調査報告
- 要人櫓台遺構面保護措置・石垣最終解体ライン了承
- 8月21日 1区石垣解体開始
- 10月9日 要人櫓台石垣解体調査成果報告
- 要人櫓台石垣復旧設計案了承
- 10月30日 要人櫓台石垣解体終了
- 12月15日 1区解体調査成果報告・一部設計内容の変更了承

要人櫓台石垣解体調査（調査結果からみた石垣修理履歴）

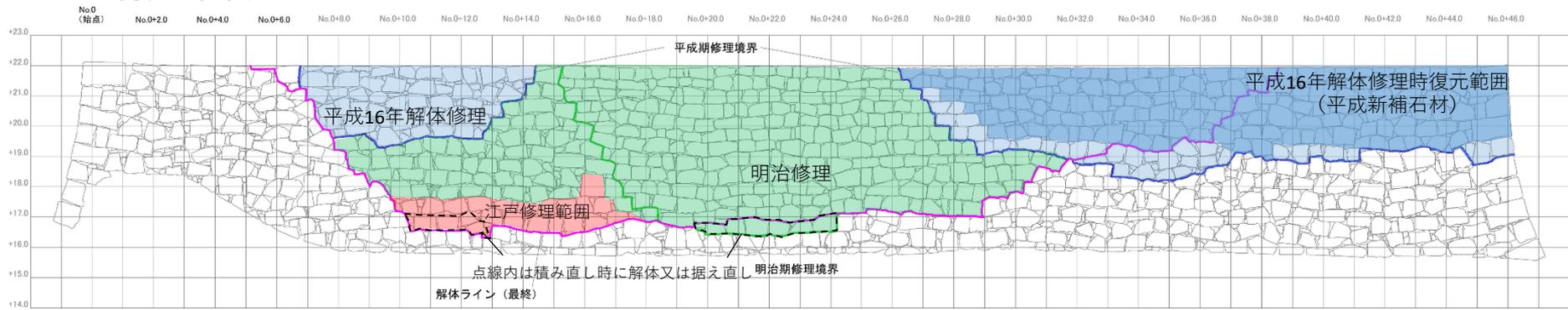
解体調査の結果、平成16年解体修理・復元（青着色部分）、明治修理（緑着色部分）、江戸修理（赤着色部分）の石垣を確認した。礎石を伴う江戸期の遺構面と明治22年以降の石製の溝を伴う遺構面（オレンジ着色部分）を確認した。H255西側で解体前の想定（立面図緑色ライン）よりも広い範囲で明治修理が及ぶことがわかった。



要人櫓台石垣H255 平面オルソ写真20200522 江戸期 遺構面検出状況（上が北）



H255 現況立面図



江戸期遺構面



玉石混ざりの江戸期遺構面を確認し、要人櫓台に伴う礎石群を検出。
検出遺構面表層で地割れを確認。
※黄色の枠内は、平成16年度解体修理範囲

1区検出状況（西から）



江戸期遺構面は、赤茶色粘性土と玉石混ざりの土層で形成されており、礎石群はそれぞれに帰属し、二種類あることを確認した。
2区内江戸期栗石が南側に向いて傾斜。
→明治22年の地震被害の痕跡

2区北西隅付近 江戸期栗石面直上礎石 20200609（東より撮影）

明治22年以降遺構面



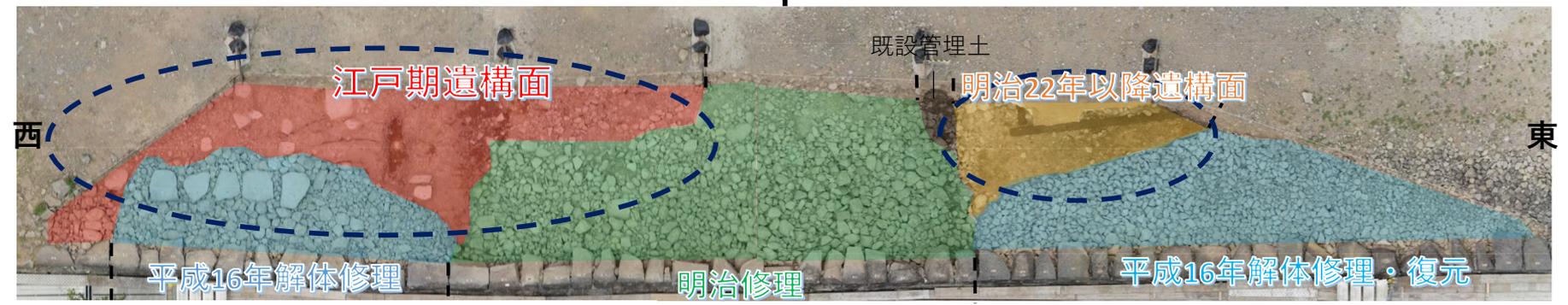
平成16年度の調査時に検出した凝灰岩製の溝を再検出した。溝設置埋土が明治栗石の上層にあることを確認。
→溝の設置が明治22年以降である。

溝設置部分堆積状況（南から撮影）



今回の解体調査では、溝の塞石（オレンジ着色部分）を西側で確認した。溝は西から東に向かって傾斜している。

溝設置部分堆積状況（左が北）



要人櫓台石垣H255 平面オルソ写真20200522 江戸期 遺構面検出状況（上が北）

平成修理石垣の特徴は、築石の上下間には扁平な石材を入れている。これは、飯田丸五階檜台解体調査時に確認した積み方と同じである。栗石は、扁平な形状の石材を含んだ角礫と円礫が混在している。

明治修理石垣の築石真下には平成修理石垣のよう石材は多量にみられないが、上下の築石接地面全体に土が入る。栗石にも全体的に土が混ざる。

1区江戸期の石垣は、築石同士の接点に土がほとんどなく、石材の縁辺部で直接接し、裏側に割石を重ねることで高さを調整している。

平成



栗石検出状況

石材形状☞扁平な形状の石材を含んだ角礫と円礫が混在

石材サイズ☞15～20cm



築石接点の状況

明治



栗石検出状況

石材形状☞角礫主体で部分的に円礫が集中的に混じる

石材サイズ☞15～20cm



築石接点の状況

江戸（1区）



栗石検出状況

石材形状☞角礫主体の中に平たい割石を一定量含む。



築石接点の状況

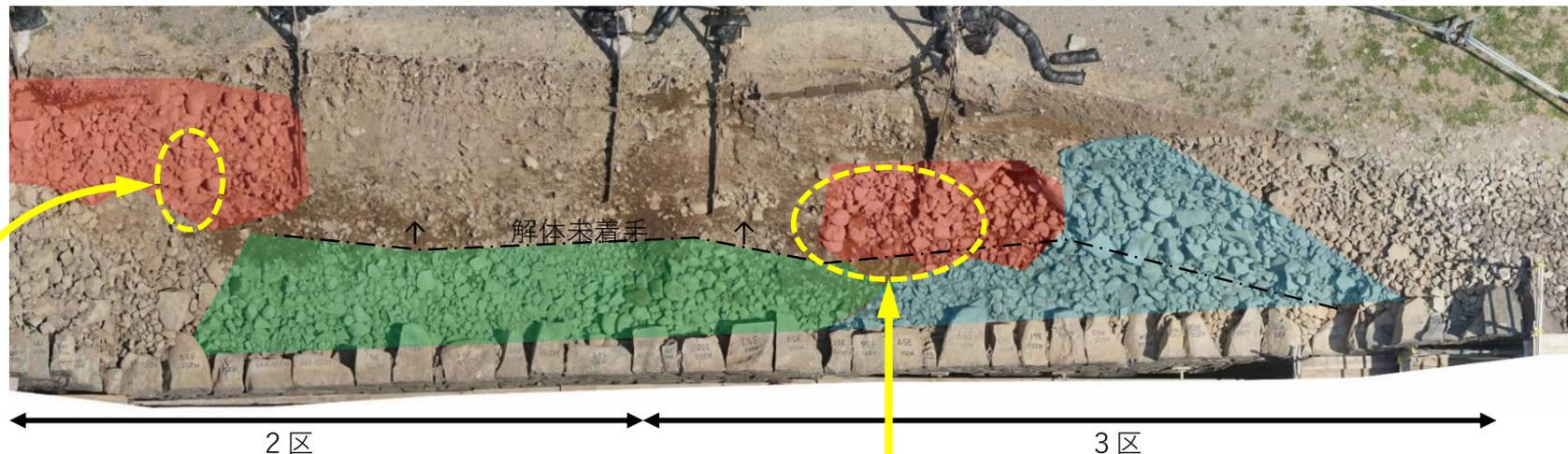
要人櫓台石垣解体調査（石垣背面の江戸期遺構）

7段目解体前 2・3区北壁断面で石列を検出。

石列は3箇所を確認され、栗石よりも大きい石材（25～30cm）で構成されている。

3区で検出した石列に関しては、石列間で栗石の形状が異なることを見出した。

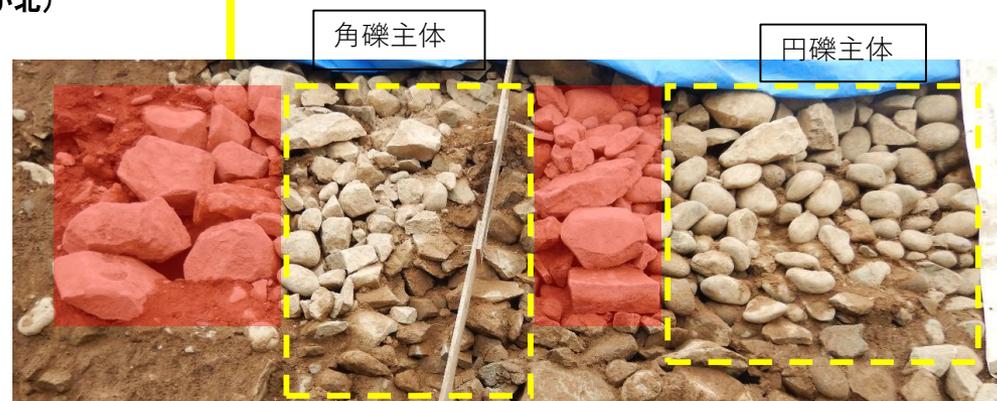
1区江戸期解体時には石垣背面で石列は確認していない。



築石7段目解体前平面オルソ写真（20200624撮影 上が北）



2区北西隅 北壁石列検出状況（20200702南より撮影）



3区北壁石列検出状況（20200624南より撮影） ■ 赤色部分：石列検出部分

- ①礎石を伴う江戸期遺構面と凝灰岩製の溝を伴う明治22年以降の遺構面を確認した。江戸期遺構面は、赤茶色粘性土と玉石混じりの土層で形成されており、礎石群はそれぞれに帰属し、二種類あることを確認した。
- ②解体範囲北壁で明治22年地震被害に伴う修理時の背面構造が栗石のみではなく土砂混じりであること、江戸期遺構面がのっていた江戸期栗石層の一部で滑り面を確認した。
- ③明治修理石垣の築石同士の接地面に土が多量に含まれることを確認した。
- ④飯田丸五階櫓台石垣解体時に検出した石列を要人櫓台石垣解体時にも確認した。また、石列を境に栗石の形状が異なるということも確認した。
- ⑤明治修理石垣と江戸期構築当初石垣の背面構造は、飯田丸五階櫓台石垣のそれぞれの時期の石垣と全く同じ構造であることがわかった。
- ⑥1区江戸期石垣の栗石には石列が伴わず、栗石に扁平な石が多く投入されている傾向がある。細川期以前の瓦（桔梗紋瓦）が出土していないことや五階櫓台の江戸期修理背面栗石の様相と酷似していることから、江戸時代中の修理の可能性も想定する必要がある。